

Mandolin & Guitar Ensemble Bel Cuore

ベル・クオーレ

マンドリンコンサート No.34



日時／2016年5月14日(土)開場 PM1:30 開演 PM2:00

場所／浜離宮朝日ホール

主催 ベル・クオーレ

ご挨拶

本日はご多忙の中、ベル・クオーレの定期演奏会に足をお運びいただきまして、ありがとうございます。皆様方が私達の音楽活動を暖かく見守り、ご支援くださっているお陰で、無事第34回の定期演奏会を迎えることができました。

ここ浜離宮朝日ホールでの開催も、大分定着してきた感があります。マンドリンの美しい音色を豊かに響かせてくれるこのホールで演奏できますことは団員にとって大きな喜びであり、ご来場いただく皆様にも音楽を存分に堪能していただける最適な会場であると確信しています。

今回のプログラムも様々な作曲家の作品を取り揃えています。

まずはバッハの管弦楽組曲より通称「G線上のアリア」として有名な1曲。グリーグの「2つの悲しい旋律」は、詩人が豊かな北欧の自然と苦渋の内面を詠った歌曲が元となっています。プッチーニの「菊」は、その旋律が昨年間奏曲を演奏した「マノン・レスコー」に転用されていることに親しみを感じ選びました。RVWの「グリーンスリーブス幻想曲」は、なじみあるイギリス民謡の旋律が軸になっています。ラヴェルの「マ・メル・ロワ」は、童話に基づく5つの小品の組曲で、2人の小さな子供のために作曲されたピアノ連弾曲がおもとです。

今回の演奏で私たちが大きなテーマとしているのは『音色』の表現です。ともすれば平板になりがちなマンドリン演奏で、これらの曲の求める多彩な音色をいかに表現するか。楽譜上の音符をなぞるだけでは済まされず、練習中大いに悩みながら試行錯誤を続けてまいりました。本日の演奏会では、その成果が存分に発揮できるよう努めてまいります。

この場に集まっていたいただいた皆様方に深く感謝申し上げるとともに、これからもさらに良質の音楽をお届けできるよう精進してまいりますので、よろしく願いいたします。

ベル・クオーレ団員一同

ベル・クオーレでは演奏メンバーの募集を行なっております。
マンドリン合奏への参加をご希望の方は、井上(03-3712-3819)
または bel.cuore.mail@gmail.comまでご連絡下さい。

プログラム

管弦楽組曲第3番BWV1068より

「G線上のアリア」(マーラー編曲版) J.S.Bach
編曲/佐藤 洋志

2つの悲しい旋律 op.34 E.Grieg
編曲/佐藤 洋志

弦楽四重奏「菊」..... G.Puccini
編曲/佐藤 洋志

——・ 休 憩 ・——

グリーンスリーブスによる幻想曲 R.Vaughan Williams
編曲/佐藤 洋志

組曲 マ・メール・ロワ M.Ravel
編曲/佐藤 洋志

第1曲 眠れる森の美女のパヴァーヌ (Pavane de la belle au bois dormant)

第2曲 親指小僧 (Petit Poucet)

第3曲 パゴダの女王レドロネット (Laideronette, impératrice des pagodes)

第4曲 美女と野獣の対話 (Les entretiens de la belle et de la bête)

第5曲 妖精の園 (Le jardin féérique)



管弦楽組曲第3番BWV1068より

「G線上のアリア」(マーラー編曲版) J.S.Bach 編曲/佐藤 洋志

グスタフ・マーラー(1860-1911)は、1909年にヨハン・ゼバスティアン・バッハ作曲『管弦楽組曲』の第2番と第3番から自由に曲を抜粋、再構成しました。

第3番から選ばれた「アリア」は、原曲と同一の弦3部と通奏低音の構成ですが、奏法や表現記号などが詳細に加えられています。

なお、通称である『G線上のアリア』とは、ヴァイオリニストのアウグスト・ウィルヘルミがピアノ伴奏付きのヴァイオリン独奏のために編曲した際、ニ長調からハ長調に移調しており、ヴァイオリンの4本ある弦の内の最低音の弦(G線)のみで演奏できることに由来します。

本日演奏する編曲ではマーラー編曲版を基準とし、弦3部をマンドリン・マンドラが担当し、ギター・チェロ・コントラバスが通奏低音を担当します。

2つの悲しい旋律 op.34

E.Grieg 編曲/佐藤 洋志

ノルウェーの作曲家グリーグ(1843-1907)は、歌曲であるop.33「12の歌」の中から〈胸のいたで〉と〈過ぎた春〉の2曲を抜粋し、弦楽合奏曲「2つの悲しい旋律」として1880年に発表しました。

歌曲のテキストとなったオムスン・オラヴィン・ヴィニエの詩において、〈胸のいたで〉では「平穏は、現世の悩みから退いた後、新しい春がめぐり来る度ごとに花咲くことによつてのみかきたてられる」と歌っています。

〈過ぎた春〉では、雪が解け花が咲き乱れ輝く北国の春の中、自身の最期を覚悟しつつ悠久に続くであろう自然の美しさに魂をゆだねる心情を描いています。

曲の構成としては、〈胸のいたで〉は最初に提示された主題が3回繰り返されるだけのシンプルなものとなっています。調号はハ短調ですが、主題は途中から長調の性質を垣間見せ、最後はハ長調として終結します。

〈過ぎた春〉は、2小節の短い前奏から始まり、ト長調、ホ短調、やや快活テンポのロ長調と揺れ動く気持ちのように移り変わりますが、ト長調に戻ることで平穏な春を感じさせます。より繊細な響きで同じ構成を繰り返しますが、重心は高音域に移りながら更に力強く歌い上げられ、再び訪れた春がよりいっそう儚く感じられます。

情緒的で繊細な詩と音楽の世界は、日本人の感性にも合致するようにも思われます。



弦楽四重奏「菊」

G.Puccini 編曲／佐藤 洋志

ジャコモ・プッチーニ(1858-1924)は、「トスカ」「ラ・ボエーム」「蝶々夫人」などのイタリア・オペラを代表する作曲家として知られていますが、この「菊」は彼の作曲の中では珍しい弦楽四重奏の作品です。

この曲は、イタリアのサルディーニャ王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世の次男として生まれ、1870年にスペインの王として迎えられたアマデオ1世(1845-1890)の追悼のために書かれたものです。プッチーニは悲しみのうちに、この曲を一晩で書き上げたといわれています。日本では「菊」というのは市花ですが、イタリアでもこの花はお墓参りに使われるそうです。

ABAの3部構成からなり、全体に悲哀を感じさせる、かつ強い情感を持った美しい旋律に綴られた曲となっています。3年後に作曲されたオペラ「マノン・レスコー」にもこの「菊」の旋律が登場し、オペラの最後に当たる悲劇的なシーンを彩っています。

グリーンスリーブスによる幻想曲

R. Vaughan Williams

編曲／佐藤 洋志

レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872-1958)(以下、RVW)はイギリスの作曲家で、作曲家としては遅咲きであり、最初の歌曲を出版したときには30歳になっていました。

民謡の採集や教会音楽の研究を通して独特の作風を確立し、イギリス人による音楽の復興の礎を築きました。イギリスの田園風景を彷彿とさせる牧歌的な作風は、広くイギリス国民に愛されています。

RVWは1904年、イングランドの各地方に根付いていた民謡やキャロルが、地方での識字率向上や印刷楽譜の普及に伴って口頭伝承の影が薄くなっているために、急速に失われつつあることに気づき、保存に務めようとなりました。自ら田舎を訪ねて歩き、その多くを編曲して保存しながら、それらの音楽の美しさや普通の人々の日常の中で培われた名もない歴史に魅了され、自作の楽曲に歌曲や旋律の一部を取り入れています。

本日演奏する「グリーンスリーブスによる幻想曲」は、RVWが1928年に完成した歌劇『恋するサー・ジョン』の中で使われている2つの民謡をもとに、作曲家ラルフ・グリーヴズが編曲・独立させたといわれている作品で、1934年にRVW自身の指揮により初演されました。

曲全体としてはABA形式となっており、Aは伝統的なイングランドの民謡として有名な「グリーンスリーブス」がもとになっています。

中間部であるBの旋律は、RVWがノーフォークで採集した民謡「美しきジョン」がもとになっています。

組曲マ・メール・ロワ

M. Ravel 編曲／佐藤 洋志

「マ・メール・ロワ」(英語ではマザーグース、こちらの方が通りが良いでしょう)は、フランス近代の代表的な作曲家であるモーリス・ラヴェル(1875-1937)による作品ですが、元々はピアノの連弾曲として作曲されたものです。

子供好きのラヴェルが、友人であるゴデブスキ夫妻の2人の子、ミミとジャンのために作曲し、献呈したもので、1908年～10年に作曲され、1910年4月20日に初演されました。なお、「マ・メール・ロワ」には他にもラヴェル自身による管弦楽組曲版、バレエ版(ともに1911年編曲)があり、いずれの演奏もよく知られています。

「マ・メール・ロワ」は5曲からなる組曲で、それぞれ童話集の作品をテーマとしていますが、それぞれ個性豊かな曲が集まっています。子供向けの連弾曲ということもあり、ラヴェルの他のピアノ曲に見られる難易度の高さは感じられませんが、音楽的に高いレベルで作り込まれており、子供のための作品というよりは、「子供心を描いた大人の作品」のようにも見えます。

◇第1曲 眠れる森の美女のパヴァーヌ (Pavane de la belle au bois dormant)

4/4拍子 Lent(遅く)イ短調。シャルル・ペローの童話集『マ・メール・ロワ』の「眠れる森の美女」から。20小節の短い曲ですが、全音階による美しい旋律が印象的です。

◇第2曲 親指小僧 (Petit Poucet)

2/4拍子 Tres modere(きわめて中庸に)ハ短調。『マ・メール・ロワ』から。「一寸法師」と呼ばれることもあります。冒頭の無限音階のように続く音型と、夜中に道に迷った様子を描いた不安な旋律が特徴的です。

◇第3曲 パゴダの女王レドロネット (Laideronette, impératrice des pagodes)

2/4拍子 Mouvt de Marche(行進曲の速さで)嬰へ長調。ドーノワ伯爵夫人マリー・カトリーヌの童話『緑の蛇』から。パゴダとは中国製の首振り陶器人形のことです。東洋的な#(シャープ)による5音階と、独特のリズムを持った旋律が目を引きまます。

◇第4曲 美女と野獣の対話 (Les entretiens de la belle et de la bête)

3/4拍子 Mouvt de Valse tres modere(きわめて中庸なワルツのリズムで)へ長調。マリー・ルブラン・ド・ボーモン『子供の雑誌、道徳的な物語』の「美女と野獣」から。美女の旋律はエリック・サティの「3つのジムノペディ」、野獣の旋律はドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」のオマーージュと言われています。互いの旋律が会話を示し、やがてグリッサンドで示される野獣の魔法が解け、美しい王子となり大団円となる様子が優美に展開されます。

◇第5曲 妖精の園 (Le jardin féerique)

3/4拍子 Lent et grave(ゆっくり、そして荘重に)ハ長調。「眠りの森の美女のパヴァーヌ」と同じくペローの「眠れる森の美女」から。眠りについた王女が王子の口づけで目を覚ますシーンが描写され、絶対的と言えるハ長調の締めくくりは、ラヴェルの音楽に込めた「理想」を示しているかのようです。

指揮者

小出 雄聖

大阪に生まれ、4歳よりピアノ、5歳よりヴァイオリンを始め、相愛学園子供のための音楽教室にて斎藤秀雄氏のもと同オーケストラコンサートマスターを務める。演奏家を目指して東京芸術大学付属高校を経て同大学を卒業するが、手の故障を契機に指揮活動を始め、セルジュ・チェリビダッケ氏のセッション、タングルウッドのサマーセッションにて研修、とくにチェリビダッケ氏からは多大な影響を受ける。

1996年に渡米し、マイケル・チャーリ氏のアシスタントを皮切りに、ボストン・ムジカ・ヴィヴァ、マネス・オーケストラ、ニューアムステルダム・シンフォニーを振る。翌年ニューヨーク・フィルハーモニック主催のマスタークラスにて指揮したシューマン、ブラームスをクルト・マズア氏が絶賛、「的確で創造性に富む指揮」と評され同氏アシスタントの一方、フィリップ・アントルモン氏の信頼を得て世界のオーケストラの指揮台に立つことになる。

アメリカではシンフォニエッタ・サファイヤ(1997~98シーズンから2000~01シーズンまで常任指揮者)をはじめ多数を指揮、またカリブ海のサント・ドミンゴ音楽祭にも招かれる。2001年よりヨーロッパへも活躍の場を広げ、オルケストラ・プロヴィンシア・ディ・パバリ(イタリア)、ユトレヒト・カメロルケスト(オランダ)、フィラルモニカ・ブラショフ、フィラルモニカ・オルテナ、フィラルモニカ・プロイエシュティ、フィラルモニカ・トゥルグムレシュ、フィラルモニカ・タルゴヴィシュテ、フィラルモニカ・ラムニク・ヴァルチャ、フィラルモニカ・サトゥマーレ、フィラルモニカ・スイビウ(以上ルーマニア)に登場。

「雄聖! その精緻で深い音楽!」と賞され、ノヴァ・オーケストラ・トラスシルヴァーナ常任客演指揮者兼アーティスティックアドバイザーに任命され(2006~07シーズンより)、それを機にヨーロッパでのさらなる活躍が期待されている。

日本では京都市交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、東京交響楽団、東京シティフィルハーモニック管弦楽団、広島交響楽団、群馬交響楽団を指揮。指揮法をエルヴィン・ボルン、カール・ピュンテ、久山恵子、山田一雄、マイケル・チャーリの各氏に、和声法・対位法を國越健司、池内友次郎、ロバート・クックソン、楽曲分析をカール・シャクター、作曲をディビッド・ローブの各氏に師事。

